長野県革新懇ニュース

2023 年 7・8 月合併号
発行日 7 月 25 日
会　費　2,000 円
購読料　3,000 円（送料込）
振　替　00510-3-15971

288

発　行　日本と信州の明日をひらく県民懇話会
（長野県革新懇）発行人：山口光昭　編集長：高村裕
〒 380-8790　長野市県町 593　高校教育会館内
TEL：026-234-1231　FAX：026-234-2219　ﾒｰﾙ：mail@nagano-kakushinkon.com

＝＝＝＝＝今号の主な記事＝＝＝＝＝

1面　今井和子さんインタビュー
2面　1面続き、「近現代信州の歴史回廊」関秀雄 さん
3面　新たな戦前を許すな、県革新懇が総会と講演会
　　読者の声、漢字パズル
4面　雨よ降れ 「孤独死」に思う　窪島誠一郎さん
　　戦争を語り継ぐ　北原高子さん
　　映画評論『戦場のメリクリスマス』 内山到さん

長野県革新懇　検　索

1940年東京生まれ。45年、広島に疎開し被爆。山口県に転居し、高校まで過ごす。その後、同志社女子大学に進学。結婚し、東京で生活。2016 年に長野に転居。

核兵器禁止条約は被爆者の魂

今井 和子 さん

（長野県原爆被爆者の会会員）

脳裏に焼き付いている被爆の衝撃と実相

Q　広島での被爆の状況をお聞かせ下さい。

4歳までは東京にいましたが、3月11日の東京大空襲をきっかけに、父が東京は危ないと判断して、私と母を母の実家の広島に疎開させました。8月6日までの期間は、空襲もなく友達もできてのどかな日々でした。それが8月6日の朝に一変しました。学校の先生だった祖父と広島二中の生徒だった叔父は家を出ていて、残っていたのは祖母と母と私の3人でした。8時ちょっと過ぎ、空襲警報があり防空壕に入ろうとしたら解除になったので、一安心していました。ところが、突然激しいピカッという閃光、それから下から突き上げるようなドーンという地響きと共に、グラグラ家が揺れて、物がバアーンと飛び散り、シャリシャリとガラスの破片が飛んでいきました。まさにピカッドーンという衝撃で、今でも体の感覚として残っています。向かいの家の娘さんが下敷きになっているお父さんを「助けて、助けて」と叫んでいましたが、皆はもう自分のことで精一杯でした。その「助けて！」という悲鳴は今でも耳に残っています。

被爆後、私たち3人は6キロ離れた祇園町という山中の田舎へ行きました。祖父が何かあった時の避難場所にと家をお願いしてあったからです。その途中で見たものは、私の被爆体験の中で最も強烈なものです。細い田舎道を皆がぞろぞろ行くんですが、そこを通った馬車には怪我をして立てないような人とか、背中が焼けただれた人とかが折り重なるように乗っていました。一番後ろにいた人の背中が真っ赤に焼けただれていて、その人の虚ろな目が強く記憶に残っています。なんとか避難先の家に着き、祖父と中学生の叔父を待ちました。その家は高台にあったのですが、広島の街も空も真っ赤になっていました。

中学生の叔父は次の日に帰ってきましたが、祖父はとうとう帰ってきませんでした。母と叔父と祖母が私を家に預けて、毎日市内を捜しに行きましたが、見つかりませんでした。帰ってきた時に市内の状況をひそひそ話していましたが、電車の中に遺体がいっぱい積み重なっていたとか、水槽に群がって皆が折り重なって亡くなっていたとかでした。祖父は金歯だったものですから、母は黒焦げの死体の山でひとり一人の遺体の口を開けて見たそうです。日常とはかけ離れた異常な世界でしたが、結局見つかりませんでした。

その間に父も東京から駆けつけてきました。その家には1週間程お世話になりましたが、いつまでもいるわけにもいかないので、祖父の実家のある山口県に行って、祖父の帰りを待つことになりました。しかし、祖父が戻ることはありませんでした。行方不明者ということになっています。遺品も何もありません。

長らく封じ込めた原爆症の話題

Q　被爆の後遺症についてはどうですか？

母は爆心地の状況を見せたくないという一心で、一人で市内に行っていたものですから、急性症状が出ました。1ヶ月以内に髪がバサッと抜け落ち、下痢が続き、ちょっとした傷でもずっと直りませんでした。私が小学校の時はほとんど寝ていました。原因がわからず、「原爆ブラブラ病」なんて言われていますが、働くこともできず、動くこともできない。ただただ布団に横たわっていました。しかし、まだその頃は原爆症とか放射能被害とかということは知られていませんでした。

私が高校生までは山口県にいましたが、その頃には母の症状が被爆に関係があり、原爆症だと分かってきました。そうなると、逆にその話題は家中で封じ込めてしまい、全く話さなくなりました。話してはいけないという感じではなく、話すことが怖かったのだと思います。自分の体が元に戻らないし、3人の子どもたちにどういう影響があるのかということを怖くて口に出せなかったのだと思います。母は結局、甲状腺機能障害でした。

私が中学生の頃、第五福竜丸の事件があって、盛んに原爆被害、放射能被害が言われるようになり、その悪魔が我が家にも忍び寄るような感じはありました。原爆被害は母だけでしたが、私も被爆しているので、いつも原爆症の不安はつきまとっています。息子は体質的に白血球が少ないのですが、そのことを言われた時はもう原爆症だと思い、すごく落ち込むようなことが何かにつけありました。

被爆60年を契機に原水禁運動に参加

Q　被爆者運動に関わる経緯をお聞かせください。

夫の仕事で、東京で暮らすようになりました。そこでボランティアで出会った人が被爆者で、東友会（東京の被爆者団体）で活動していた人でした。その方が、体験した人はちゃんと東友会に登録して、被爆者としての自覚を持って、知っていることは語らなければダメだということをはっきり言っていました。しかし、その時は表沙汰にしたくないという母の思いもあり、行動を起こすことはしませんでした。

その後の被爆60年目が節目となりました。母も被爆のことを強く拒否しなくなったので、妹たちと相談して被爆者手帳の取得手続きをしようということになりました。60年経っていたので、手続きが大変でした。でも多くの方の協力で割と早く母と私の手帳が取れました。東友会に繋がってしたのは、手帳の手続きからです。それから、東友会に出入りするようになり、次は集団訴訟でした。こういう病気の方は申し出てくださいということで、原爆症に関するいろいろな病名が書かれたものが配られました。その中に甲状腺機能障害というのがあったので、母が該当すると思い申請しました。ところが、国が却下してしまったので、集団訴訟に加わりました。

集団訴訟では、裁判の途中に母が脳梗塞で倒れたので、私が代理人として証言台に立つことになりました。他の人の裁判もすべて傍聴に行きました。そうしたら、髪の毛が抜けたり下痢が続くという急性症状を皆さんが経験していることがわかりました。それで、そういうことを証言すると、国側の弁護士が当時は栄養状態が足らなかったからだとか、衛生状態が悪かったからだとかとうとうと言うんです。傍聴席にいた被爆者の皆さんからは失笑が漏れていました。そういう国の対応を目の当たりにして、国というのは平気でこういうことを言うのかと愕然としました。だから、体験した者がちゃんと言わなくてはいけないとその時に強く感じた次第です。

東京では、集団訴訟の他

【2面に続く】